

Fukuoka University MEDICAL SCIENCE NEWS

No. 71

編集・発行
福岡大学医学会
福岡大学医学部内

福岡大学医学会ニュース

退任挨拶

福岡大学名誉教授 岩崎 宏

私は昭和 53 年に故菊池昌弘教授のお世話で、福岡大学に助教授として採用され、36 年にわたり、病理学の教育・研究および病理診断に従事しましたが、このように長い間、活動の場を与えて頂いたことに深く感謝しております。福大病理学では最初は人的パワーが極めて不足していましたが、人体腫瘍の生検・手術検体を用いて細胞培養、組織化学、免疫染色、電子顕微鏡など当時の先端技術を駆使した検索を行ない、特に骨・軟部腫瘍の染色体・遺伝子異常の検出と病理診断学への応用について、他大学にはできない新しい研究を目指しました。骨・軟部腫瘍は発生頻度が少ない上に種類が多く、しばしば病理診断は困難ですが、組織形態のパターン分析と遺伝子検索を組み合わせることによって、正確な診断を下すことができるようになり、その成果について第 97 回日本病理学会総会で宿題報告を行い、日本病理学会賞を授与されました。

平成 14 年に、病理学第一講座と第二講座が統合されて一つの病理学教室となり、私は講座主任を拜命し、病理部の業務も含めて、総合的に研究、教育、病理診断に取り組む体制ができあがりました。講座の統合はかなりの難事業でしたが、教室員各位の協力で、乗り切ることができ、病理診断のレベルアップと精度管理、そして卒後研修と大学院教育に関しても大きな改善がみられました。

平成 17 年～19 年の医学部長在職中は、呼吸器内科学、形成外科学および再生移植医学の 3 講座が新設され、医学部・病院の研究・診療体制の充実をめざしました。その後これらの教室から多くの素晴らしい業績が生み出されてい

ることを大変嬉しく思います。また長年の懸案であった看護学科の開設に際しては、教員の選考等で非常に

苦労しましたが、医学科と看護学科の医学教育や研究に対する認識の違いが大きく、我慢強い努力が必要でした。

医師国家試験の成績向上は極めて重要な課題ですが、福大の国試合格率は長い間低迷していました。そこで、私どもは国試合格率 100% を目標として、カリキュラムの改善など種々の方策を講じるとともに、高木忠博医学部同窓会長をはじめとする多くの同窓会有志のご協力で、医学生意識改革を行い、モチベーションを向上させました。その効果もあって、合格率は一時的にかなり改善しましたが、その後教育方針の変更などで、合格率が再び低迷し、非常に残念でした。しかし、現在の福岡大学では朔啓二郎医学部長のご指導で、国試対策が効果をあげ、合格率が上昇傾向にあることは大変喜ばしいことです。

私は本年 3 月に退職後は、PCL ジャパン病理・細胞診センター顧問として、病理診断のレベルアップに取り組んでいます。これを通じて地域医療を支えていることに喜びと満足を感じています。福大在職 36 年を振り返ってみますと、困難な状況も数多くありましたが、皆様のご指導とご支援によって、大過なく停年を迎え、大変感謝しています。末筆ながら福岡大学医学部・病院の益々のご発展を心よりお祈りいたします。



福岡大学名誉教授 黒木 政秀



医学部の定員増と年一度の国試に思う！

65 歳までの本学における充実した 37 年間を終え、それでも気になる日本の医師不足問題の一側面について述べたいと思います。

医師不足が叫ばれて久しいですが、その数を増やすだけ済むのなら、方法として医学部入学定員の増加か医師国家試験（以下国試）の合格基準の引き下げによる医師数の増加があります。国は前者を採択し、平成 19 年度の全国医学部入学定員 7625 人から 27 年度は 9134 人まで漸増しました。実に 8 年間で 1509 人（約 20%）の増加で、110 人定員の医学部なら 14 校の新設に相当します。少子化とも相俟って質の低下は指摘されているとおりです。

一方、平成 19 年度前後の全国の国試受験者総数は 8500 人程度で、合格基準を下げ、国試合格率の全国平均を近年の約 90% から 2.5% 上げて 92.5% 前後にしたら、毎年 213 人の合格者が増加し、8 年間で 1700 人余りの医師数が増えた計算になります。しかも医師不足解消にはより即効的です。国試合格率を 2.5% も上げるなど、医師の質低下を招くとの意見もありますが、20% も水増しした医学部入学者の質の低下と比較して、また医師過剰時代の再来をにらんで、はたしてどちらが得策でしょうか。

当時、全国の医学部長病院長会議において提案し、国試合格率 2.5% アップによる医師の質低下がそんなに心配なら、国試を少なくとも年 2 回にし、1 点や 2 点不足で 1 年間で棒に振る人が出るような現在の制度はやめて欲しいと提案しました。しかし、年 1 回の国試でも準備が大変であると厚労省の役員にけんもほろろに断られました。でもアメリカの国試を考えて欲しいと思います。3 段階で日本と制度は違いますが、米国内の医学部卒の受験生は、車の運転免許と同じで、年中受験できるようになっています。勉強して実力がつけば再申請が容易なのです。国試問題の準備の大変さについては、医師に最低限必要で重要な事項の問題、そしてそれが解けたら医師なってもすぐに役立つような問題の国試にしたなら、良質な過去問のプールからの選抜で十分ではないでしょうか。むろん医学の進歩に合わせた新問題の追加は必要ですが、日本でも真剣に考える時期にきていると考えます。

福岡大学名誉教授 特定医療法人社団三光会 三光クリニック 院長 斉藤 喬雄



「透析医療に携わって」

東北大学から福岡大学に参りまして 15 年が経ちましたが、今回の定年退職まで、医学会会員の皆様には大変お世話になりましたことを感謝申し上げます。大学在職中のことについては、先日、腎臓・膠原病内科学教室で出版致しました退任記念集や、医学紀要に掲載の最終講義にいろいろ記させていただきましたので、ここでは近況として現在関わっている透析医療について述べたいと思います。

私が医師になる頃まで、腎疾患に関する根本的な治療法はなく、腎臓の荒廃により、体内の老廃物が排泄できなくなって生じる脳神経障害や水分や塩分の過剰蓄積が原因の心不全および肺水腫による、いわゆる尿毒症死に我々はまったく無抵抗でした。しかし、透析史上有名な Kolff や Kiil による血液透析器の開発や、Scribner による慢性維持透析の実用化で、1970 年代からは尿毒症で亡くなる方が著しく減少しました。私は、腎臓病の発症や悪化を防ぐことを目的に研究を始めたのですが、このような状況下で同時に透析にも関わらざるを得なくなり、東北大学病院の血液浄化療法部設置に伴い、実質的責任者である副部長になりました。

福岡大学に着任当時、腎センターの血液透析台数は 10 台しかなく、私立大学病院の規模としてはきわめて不十分でしたので、白日、瓦林、内藤の歴代病院長にお願いして、何とか収容能力が 60 人以上の血液浄化療法センターを立ち上げることができました。しかし、福大病院のような急性期医療型病院で導入された血液透析に対して、その後の維持透析を行う関連施設が必要です。さいわい社団三光会という特定医療法人が、1979 年に六本松で外来専門の維持透析施設を開設し、主として福大病院で導入された患者さんの維持透析を行い、福大病院の医療の一端を担ってきました。今年度から私がこの施設の院長となりましたが、36 台の透析機器を擁して 120 名の収容能力があり、実際の診療には福大腎臓・膠原病内科の医局員が交代制で当たっております。外来維持透析の特性上、多くの方が治療を受けながら社会人として活躍している反面、糖尿病や循環器疾患などを原疾患とする腎不全の方も少なくないので、全身的にさまざまな症状の併発がみられます。透析とともにこれらの診療を行うためには、福大病院各診療科の多大なご協力をいただいておりますが、今後ともなお一層のご支援を賜りますよう、よろしくごお願い申し上げます。

新風

平成 27 年 4 月 1 日付で
本学へ赴任、昇格された方に
自己紹介をしていただきました。

new phase



精神医学教授
川 寄 弘 詔

平成 27 年 4 月より、前任の西村良二教授の後任として精神医学教室を引き継ぐ事になりました。当教室は、初代、西園昌久教授が創設され、その理念を受け継ぎ、教室員たちは、非常にユニークな環境で臨床・研究・教育に携わっています。ユニークな点は、精神療法（精神分析）、デイケア、作業療法、集団精神療法の実践です。精神科治療では一般的に効果的な薬物療法が行われていますが、患者さんの精神的治療は完結させる、つまり患者さんの機能的回復には、こころとからだ双方についての全人的な視点が大切であるという精神が、当教室の臨床に息づいています。このような精神療法および集団療法の実践や訓練、研究を行う大学は全国に数少なく、そのひとつが福岡大学です。

厚生労働省の「自殺対策のための戦略研究、自殺企図の再発防止に対する複合的ケース・マネジメントの効果：多施設共同による無作為化比較研究 (ACTION-J)」に平成 20 年から参加し、昨年度、Lancet Psychiatry に学術報告を行いました。また、平成 18 年より当院救命救急センターに搬送された自殺企図者の調査を開始し、加えて、行政、地域医療との連携を図り、医療従事者やゲート・キーパーへの自殺予防教育も行っています。

当科は、「性同一性障害 (GID) に関する診断と治療のガイドライン」に沿った包括的な診療を行う関西以西で唯一の医療機関です。産婦人科、泌尿器科、形成外科との共同で、診断、精神科的治療、身体的治療（ホルモン療法と乳房切除術）、セカンドオピニオン、戸籍名・性別の変更時の書類作成等を行っています。

平成 26 年 11 月に当院に福岡市認知症疾患医療センターが設立され、当院神経内科と共同で、運営を行っています。脳画像検査 (MRI、SPECT など) 所見について、放射線科、神経内科と共同でカンファレンスを行っており、年間約 150 症例が集積され、データを診断精度の向上および学術的発表に用いています。

当教室は、幅広い臨床分野と精神療法を大事にし、当院他診療科とのリエゾン医療を大事にしながら、人に寄り添う医療を行い、良質な精神科医を育成する教室運営を行くのと同時に、今後は、ニューロサイエンスや、生物学的精神医学の基礎及び臨床研究活動に力を入れていきたいと考えております。



生化学教授
安 永 晋 一 郎

本年 4 月 1 日より生化学講座の主任教授を拝命致しました。私は、平成 2 年に九大医学部を卒業後、内科臨床研修を行いました。この時期に持った「患者さんはどうしてこのような病態を示すのだろうか?」という問いが、その後の臨床医・基礎医学研究者としての自分を規定したのだと思います。研修終了後、九大生医研で HLA 遺伝子多型の研究を行いました。その後、パスツール研究所で、遺伝性聴覚障害の原因遺伝子を同定しました。また留学の前後は、2ヶ所の地域中核病院で膠原病内科医としての修練を行いました。その後、思い立ちまして基礎医学の道に進み、佐賀医大分子医化学講座でアレルギー疾患に関する研究を、広島大生医研で幹細胞制御の分子機構の研究を行いました。研究テーマは変遷していますが、研修医の時に持った問いをジェネティクス・エビジェネティクスという観点から追求していったという点で一貫しています。一方で、広島大学緊急被ばく医療チームの一員として福島県に派遣され。社会の問

題に対しても医師として科学的に思考することの必要性を強く感じました。

ご縁がありまして本職に就くことになりました。教育と研究を通じて、次世代のよき MD を養成することに全力を尽くす所存であります。



看護学科教授
木 村 裕 美

看護学科の在宅看護学領域に着任いたしました。専門は在宅ケア、家族看護です。研究テーマは、主に認知症に関しまして予防からケアまで、BPSD 時のストレスについて、在宅療養者の看取り、在宅介護家族の支援、病院看護師の在宅支援のあり方、在宅ケアネットワークなどです。

今日においては、要介護高齢者は 553 万人となり、2025 年問題をふまえて鑑みますと、地域医療の充実や地域包括ケアシステムの増々の推進は大きな課題と捉えております。オレンジプランでは、「認知症になっても本人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で暮らし続けることができる」ことを目標としております。これらのことを考えますと、地域において、医療職である看護師の役割は重要な位置づけとなっております。

科目教育においては、在宅ケアは療養者を含む家族、すべての年齢およびすべての疾患が対象となり、なりよりも生活の場でのケアの提供であることを強調いたし、学生に教授いたしております。個別的な環境の中で人が生活することの意味や様々な要因が影響する生活ニーズの捉え方、療養者・家族が望むケアの提供方法について、座学のみならず、臨地実習で学生とともに考え、ディスカッションすることを常といたしております。

大学人としての社会貢献は、専門分野の講演や研修会講師等を担ってまいりました。

今後は、福岡大学のますますの発展に貢献させていただきたく、微力ではありますが、皆様のご指導のもと全力で邁進する所存であります。なにとぞよろしくお願申し上げます。



看護学科教授
久 木 原 博 子

このたび、医学部看護学科の老年看護学領域の教員として着任いたしました。高齢者の QOL の維持・向上に関することを研究テーマとしています。私が看護教育を受けた時にはまだ老年看護学の科目はなく、高齢社会の到来を目前とした平成 2 年に老年看護学が看護教育カリキュラムに位置づけられました。同時期、激変する社会の中で保健医療はキュアからケアの時代に向けて大転換が迫られ、質の高い看護系人材の確保が求められるようになり、看護教育は大学教育による看護専門職育成が不可欠となってきました。「看護師等の人材確保の促進に関する法律」が施行されたことで、平成 3 年まではわずか 11 校であった看護系大学はその後急激に増加し、平成 26 年には 241 校までになり、今後も増加が予測されています。このような社会の変化を視野に入れ、保健医療の一端を担う専門職として看護が果たすべき役割と、看護教育はどうあるべきかを考え、質の高い看護専門職者の育成と看護学の発展に寄与できるよう精進していきたいと思っています。ご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



看護学科
教授
塚 原 ひ と み

本年 4 月より、医学部看護学科の母性看護学の教授として着任いたしました。私は、福岡大学病院へ助産師として入職し産科病棟や外来で母性看護の臨床経験をいたしました。また、看護職員の継続教育の担当者として大学病院における人材育成、人事管理の企画・管理実践を経験いたしました。さらに、福岡大学附属看護専門学校の看護教員・副校長として看護教育を実践後、母性看護学の教員として看護学科教育に携わりました。その後、国際医療福祉大学福岡看護学部の看護の統合分野の教授として、初年次教育、看護管理、臨床場面を設定した教育を取り入れた看護の統合科目の教育を実践いたしました。

今年度より、私の専門分野である母性看護学の学士課程教育に携わることは大きな喜びです。言うまでもなく、看護は実践の学問であり、臨床実習における看護の学びは学生にとって不可欠な学習です。私は、現在、大学が支援する新人看護職員の離職防止に関する課題に取り組んでいます。学生の学びの質を高め、卒業後の実践力と人間力の育成には、福岡大学の 2 つの大学病院の看護実践現場との協力は不可欠です。これまでの経験を生かし、大学教育と臨床看護現場との橋渡し役となれるよう努力してまいりたいと思います。



看護学科教授
中嶋 恵美子

本年 4 月 1 日付で福岡大学医学部看護学科の基礎看護学教授として着任いたしました。私は、1978 年福岡大学病院看護部に看護師として入職以来、福岡大学附属看護専門学校専任教員、同校副校長、福岡大学病院看護師長などを歴任しました。福岡大学医学部看護学科開設後は、基礎看護学准教授として 6 年間務め、2013 年から 2 年間は国際医療福祉大学福岡看護学部および同大学院で療養支援看護学領域教授の経歴を有しております。

看護学は実践の科学といわれる学問です。看護学科教員は自らが看護実践力を示し、学生の『知っている』『わかる』から『できる』レベルへの学習の深まりを支援できなければなりません。また、学生が実習での経験を基に主体的に学び、社会の変化に対応できる力（自己教育力）を身につけていくような学びを支援することも求められます。私は、看護学科教員には『教える』から『学びの支援』へのパラダイムシフトが必要であると考えています。

私は、学生ひとりひとりを大切にしながら、『学生中心』と『共に考え、共に学ぶ』を心がけ、『どうすることが学生にとって教育になるか』との視座から考え行動しようと思っています。地域・社会に貢献できる看護専門職の育成に、専心したいと決意を新たにしていますので、どうぞご指導、ご鞭撻の程よろしく願っています。



腫瘍・血液・感染症内科学
教授
高松 泰

1987 年に九州大学医学部を卒業した後、九州大学で臨床・研究を 5 年間、県立宮崎病院で臨床を 4 年間、オーストラリアのハンソン癌研究所で研究を 3 年間行いました。1999 年に帰国した際に福岡大学病院に赴任し、その後 16 年間福岡大学で血液内科学、臨床腫瘍学の診療・研究・教育に務め、2015

年 4 月に腫瘍・血液・感染症内科の教授に就任しました。

診療では、臓器横断的に固形がん、血液腫瘍に対する薬物療法を実施しています。抗がん薬の感受性が高い血液腫瘍に対して治癒を目指した強力な薬物治療を行うとともに、固形がんには外科、放射線科と協力を集学的治療を実践しています。がんに伴う症状や治療の副作用など身体的な苦痛に加えて、がん患者が抱える精神的・社会的な苦痛にも配慮した緩和医療を多職種で協力して実施しています。また病院内で発生した重症感染症患者の治療に介入し、感染症コントロールに務めています。臨床教育では、問診・身体診察の技術を磨き、心のケアを含めた身体全体を診ることができる医師の育成を目指しています。研究では、がん患者の治療成績向上を目指して臨床研究を精力的に実施しています。今後も医学教育の質を高め、がん患者の治療成績を向上させるべく努力を重ねる所存です。



総合診療部教授
鍋島 茂樹

この度福岡大学病院総合診療部の教授に昇格いたしました。福岡大学病院の総合診療部は平成 17 年に創設され、ちょうど 10 年がたちました。私どもの診療科は一般内科であるとともに、特に伝統的な内科診断学を若い医師達に教える教育部門と言う側面もあります。臓器別専門化する大学病院の診療科にあって、将来の地域医療に役立つ良質な町医者を輩出するのが役割です。2017 年度から新しい専門医制度のプログラムが開始されます。総合診療はこの新専門医制度で基盤診療専門医と認定され、ようやく「総合診療医学」という分野が社会に広まってきたのを感じています。

自身の研究テーマは、感染症と漢方医学です。インフルエンザに麻黄湯が効果を発揮する事が知られていますが、そのメカニズムはまだよく分かっていません。漢方薬に抗ウイルス効果があるというのは、なかなか信じてもらえませんが、現在微生物免疫学教室の廣松教授と共同でそのメカニズム解明を目指しています。趣味は音楽と剣道です。本は歴史物が大好きです。昇格を機に「福岡大学医学会」に何らかの貢献ができればいいと考えていますので、どうぞこれからもよろしく願ひ申し上げます。



筑紫病院内視鏡部
教授
八尾 建史

福岡大学医学部のみならず、筑紫病院内視鏡部・初代教授に就任しました八尾建史です。S 33 年 8 月 15 日、長崎県島原市で生まれです。S 52 年、長崎県立島原高等学校を、S 58 年に九州大学医学部を卒業しました。その後、東京女子医科大学で卒業研修を行い、平成元年から福岡大学筑紫病院消化器科へ入局しました。平成 8 年に同内視鏡部助手に採用して頂きました。

私のライフワークは、内視鏡画像診断の客観的解析法を確立することです。その一環として平成 12 年から早期胃癌に光学的に 80 倍まで拡大観察できる拡大内視鏡を応用し、世界に先駆けて早期胃癌に特徴的な拡大内視鏡所見を報



講演された先生方を囲んで(左から小玉先生、西中村先生、清水先生、朝医学会会長、川壽先生、安野先生、中島先生、今福先生)

祝 第17回 福岡大学医学会賞

50音順



安野 哲彦

Functional analysis of iPSC-derived myocytes from a patient with carnitine palmitoyltransferase II deficiency



清水 知彦

Rosuvastatin Activates ATP-Binding Cassette Transporter A1-Dependent Efflux Ex Vivo and Promotes Reverse Cholesterol Transport in Macrophage Cells in Mice Fed a High-Fat Diet



西中村 瞳

GM-CSF Treated F4/80+ BMCs Improve Murine Hind Limb Ischemia Similar to M-CSF Differentiated Macrophages

告しました。その後、厚生労働省の班研究で多施設前向き無作為比較試験を行いその有用性を証明し、平成20年、拡大内視鏡観察が保険収載されました。本観察法は、日本国内のみならず世界中で広く臨床応用されています。

平成17年に福岡大学在学研究員として1年間、英国 Nottingham 大学へ留学させて頂きました。英国医師免許を取得し、主に消化器内視鏡を用いた診療と臨床研究を行い、さまざまな新しい知見を論文にまとめ学術誌に出版することができました。

平成23年、福岡大学総合科学研究Ⅰの研究助成も受け、平成24年から福岡大学基盤研究機関である光学医療研究所の所長を務めています。その研究で、世界中の内視鏡医療教育に用いる e-learning system を開発し、昨年、有用性を証明することができました。現在、無料で全世界の内視鏡医に公開する準備をしています。

振り返ると、私は、平成元年以来、西日本を代表する総合大学である福岡大学のふところの深い恩恵を最大限に受け、仕事ができたと再認識しています。そして、その中でも、福岡大学筑紫病院は私の人生そのものです。今後は、これまで蓄積してきた「学」と「術」を後輩に伝承し、福岡大学病院と福岡大学筑紫病院に、質の高い医療の「道」を実践できる臨床医を育てることを第一の目標にします。そして、新築の筑紫病院に常に消化器内視鏡の新しい風を送り、患者さんに信頼される医療を行い、福岡大学筑紫病院のスタッフが明るく元気に働ける職場になることにめざしたいと思います。今後ともよろしくお願ひします。



看護学科准教授
池田 佐知子

平成 27 年 4 月より、看護学科地域看護学の准教授を拝命いたしました池田と申します。

私は、千葉大学看護学部を昭和 59 年に卒業以来、約 27 年間佐賀県の保健師として、県内 4 保健所、県庁 2 課、児童相談所、唐津市（派遣）に勤務し、国際医療福祉大学福岡看護学部で約 2 年間教員を勤め、佐賀市の嘱託保健師を経て、現在に至ります。その間、長男の大学進学による自らの『空の巣症候群』回避のため平成 17 年から福岡大学大学院人文科学研究科にて臨床心理学を学び、まさに福岡大学は学ぶことの幸せを教えてくれた母校です。

佐賀県の保健所では、主に未熟児・結核・難病・精神の家庭訪問、保健指導、研修会等のほか各種予防事業の企画・実施に取組みました。県庁では、医療法・医師法等全般に携わり、第 5 次医療法改正に伴う 4 疾病 5 事業の医療計画策定、救命救急センターの指定、社会医療法人認定等のほか、罰金刑以上が確定した医療従事者の行政処分に関する業務にも従事してまいりました。また、児童相談所では児童福祉司として、虐待の緊急対応のほか、非行少年少女と膝附あわせて語り合い、時には鑑別所まで面会に行くなど、人の育ち・家族の難しさ哀しさに触れ、これらを未然に防ぐべく後進育成の必要性を痛感し、教育の道を志しました。学生を含め未来ある子どもたちの心豊かな成長に尽力していきたいと考えております。今後とも御指導御鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。



看護学科准教授
中島 充代

このたび、医学部看護学科准教授を拝命いたしました。私は昭和 59 年に国立福岡中央病院附属看護専門学校を卒業後、看護師、看護学校教員になりました。しかし、知識および能力不足を痛感し、福岡県立大学人間形成学科に入学しました。卒業後、大学助手時代に乳がんを患い、がん患者の心理は重要なテーマだと考え、久留米大学大学院で臨床心理学を学びました。修了後は、福岡病院、太宰府病院で精神科看護師として経験を積みました。

その後、看護学校、短期大学、看護大学に勤務し、九州大学大学院で看護学の学位取得後、同大学の精神看護学講師を経て、現在にいたっております。

精神看護学のなかでもサイコ・オンコロジーに興味をもち、乳がん患者を対象とした心理教育、治療に係わる意思決定のあり方を調査してまいりました。今後は、地域精神保健医療福祉の向上に貢献できるよう、精神科訪問看護師への教育プログラム開発に取り組んでいきたいと考えております。多職種の皆様方からもご指導ご鞭撻を賜りますよう、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。



卒後臨床研修センター
准教授
河村 彰

この度、福岡大学病院 卒後臨床研修センターの准教授を拝命致しました。私は平成 6 年に福岡大学医学部を卒業後、心臓・血管内科学（旧第二内科）へ入局し、循環器病学について、臨床医としての経験を積ませていただきました。その後、学位取得、ドイツ留学を経て、福岡大学病院循環器内科講師として、臨床と研究、教育に携わらせて頂きました。常々、大学病院は最高峰の医学教育機関であるべきだと思っております。しかし、実際にはなかなか有効な医学教育の実践が出来ておらず、忸怩たる思いであります。そこで公募を契機に、平成 25 年 4 月より卒後臨床研修センターの専任医師に着任させて頂きました。着任当初は知識不足もあり、研修医の指導やセンターの運営に際して、大変な苦勞をいたしました。沢山の方々のご支援により、大きな問題もなく、ここまで卒後臨床研修センターを運営しています。着任後の二年間、研修医への個人面談の実施や、「指導医評価表」「メディカルスタッフ評価表」の作成など、自分なりに臨床研修に関する企画を立案し、実行して参りました。それらの企画を通じて、自ずと研修プログラムに関する多くの事を学ぶ事が出来たし、問題点も発見出来ました。また、良い医師、良い病院を作るための教育の大切さも、再度痛感しています。しかし、教育には終わりがなく、私自身の教育に対する取り組みも始まったばかりであると思っています。昨年度は、医師臨床研修医マッチングにおいても福岡大学病院の基本プログラムは Full-match を果たし、多くの研修医が福岡大学病院を選択してくれました。正にこれから、という思いがあります。

今回、准教授へ昇格させて頂いた事を良い契機として、これまでの経験により得た臨床研修に対する知識を基に、ますます研修医教育に邁進し、ひいては福岡大学病院の発展に少しでも尽力できればと考えております。今後とも皆様のご指導のほど、よろしくお願ひ申し上げます。



医学教育推進講座
講師
八尋 英二

平成 27 年 4 月より福岡大学医学部医学教育推進講座の講師を拝命致しました。医学教育推進講座は、昨年 10 月に福岡大学医学部生が 6 年間で地域医療を初めとした社会に貢献できる良医を育てるために医学教育を充実させる為に開講したばかりの医学部の中で、最も新しい講座です。福岡大学医学部のホームページでも講座紹介では「基礎系研究室」、「臨床系研究室」とは別の「医学教育」分野であります。現在は、安元佐和教授を筆頭に出石宗仁教授と森原大輔講師の 4 人で 1 年生から 6 年生迄の医学教育に取り組んでいます。今後も、益々皆様のご理解、ご協力を得ながら良医を育てる工夫を行って行く次第です。

私は、平成 7 年福岡大学医学部卒業し循環器内科を志し、福岡大学医学部第 2 内科に入局させて頂きました。その後は、平成 13 年に福岡大学大学院を卒業。平成 18 年までは福岡大学筑紫病院循環器内科に所属し、その後 3 年間は米国留学中に心筋細胞再生などをテーマに University of Alabama at Birmingham と Emory 大学で研究して参りました。平成 21 年からは朔啓

二郎教授のもとで循環器内科の研鑽を積まさせて頂いた後、現在に至ります。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。



循環器内科講師
池 周而

このたび、朔啓二郎教授の御推挙により福岡大学病院循環器内科の講師を拝命いたしました。私は、平成 13 年に福岡大学医学部を卒業後、福岡大学第二内科学教室に入局いたしました。当院及び福岡大学筑紫病院にて研修を終え、その後、福岡済生会総合病院や福岡白十字病院で勤務させて頂き、救急医療、特に心臓カテーテル検査・治療 (PCI) に携わり修練をさせて頂きました。2006 年からは、朔教授、三浦教授、西川診療准教授の勧めもあり、医師になって 6 年目から大学院に進学しました。大学院進学後も臨床大学院生として、重症患者の管理、心臓カテーテル治療を中心に業務をこなしていたのですが、現在、福岡白十字病院 副院長である白井和之先生に御指導を仰ぎながら、空いた時間を利用して、当院で行われた心臓カテーテル加療症例の Data 解析、症例の Data base 化を始めました。これは地味で、大変な作業でしたが、海外から発信された Data に基づく心臓カテーテル治療の Evidence が、日頃、実臨床で我々が受ける印象と異なる事がしばしばあり、この違和感の正当性を日本人の Data として証明したい! という反骨精神が大きなモチベーションになりました。心臓カテーテル治療 1 症例につき約 600 項目の膨大な Data を数人の仲間と日々、蓄積し、関連施設の施行症例まで範囲を広げ、この Data base は現在、約 2500 症例、3000 病変を登録した巨大な Data base となりました。これは、Fu-registry と命名され、私の卒業論文も含め、数多くの臨床研究発表や、論文が生み出されています。大学卒業後から現在まで、私は心臓カテーテル治療を中心として臨床に従事させて頂いておりますが、ここ数年は特に、Life style の変化に伴い狭心症、心筋梗塞の若年化が進んでおり、虚血性心疾患の症例は増加の一途を辿っていると強く感じています。その為、昼夜を問わず緊急加療に追われている状況にありますが、初心を忘れず、福岡大学からより質の高い Evidence を発信出来るように、更に Fu-registry を充実させる努力をしていく所存です。また、日々の診療においても、未だ至らぬ点は多々あるかと思いますが、自らに与えられた責任を果たせるよう精進して参りますので、今後とも御指導、御鞭撻の程宜しく願い致します。



再生医療センター
講師
伊東 威

このたび、小玉正太教授、山下裕一教授のご推挙により福岡大学病院再生医療センター・講師を拝命いたしました。私は 1999 年に福岡大学医学部を卒業し外科学第一講座 (現消化器外科) に入局後、福岡大学病院および関連病院をローテーションしました。その後、糖尿病に対する細胞移植法である膵島移植に関する研究で学位を取得しました。大学院生時代の 2006 年に福岡大学病院で九州一例目の臨床膵島移植が施行され、心停止ドナーからの膵臓摘出・膵島分離・膵島移植の全行程に携わることができました。この経験でさらに膵島移植に対する興味を湧き、2009 年から 2012 年まで膵島移植症例が多いアメリカ・テキサス州ダラスにあります Baylor University Medical Center, Baylor Research Institute, Islet Cell Laboratory に留学し、ヒト膵島分離・移植の経験を積みました。帰学後も、臨床膵島移植および膵島移植に関する基礎研究を継続しております。

再生医療センターは、今年度より新設された診療部門で、膵島移植をはじめ、血管病変に対する細胞治療、間葉系幹細胞を用いる治療など多岐にわたる細胞治療を展開していく予定です。細胞治療・再生医療の対象疾患は多岐に渡りますので、各専門科の先生にご指導を仰ぎながら進めて参りたいと思っております。

ります。

臨床・研究・教育と微力ではありますが、母校である福岡大学に貢献できるよう頑張っていく所存です。今後ともご指導・ご鞭撻のほど宜しく願いいたします。



眼科講師
梅田 尚靖

このたび、内尾英一教授のご推挙により福岡大学病院眼科の講師を拝命致しました。私は、平成 7 年に福岡大学医学部を卒業し、福岡大学医学部眼科学教室に入局致しました。当時の教室は我が国の硝子体手術のパイオニアある大島健司先生が主宰されており、網膜硝子体疾患の基礎的研究にも力を入れて取り組まれていました。現在でも眼科分野での重篤な視力障害を来す疾患である糖尿病網膜症や加齢黄斑変性の病態は血管新生によるものですが、90 年代後半より分子生物学的手法の発展に伴い血管新生のメカニズム解明の研究が盛んに行われていました。その時期に大学院に進み、林英之教授、尾崎弘明現診療教授のご指導の元、『眼内血管新生』に関する研究をすることになりました。大学院修了後、眼内血管新生の分野は病態解明から創薬の時代となっており、ちょうどその折、米国のジョンズ・ホプキンス大学に留学する機会を与えていただきました。ジョンズ・ホプキンス大学では動物モデルを用いた新生血管成熟や退縮に関する研究や米国内外から持ち込まれる新薬の血管新生抑制効果についての研究に従事しました。帰国後の平成 17 年より助手 (現助教) として福岡大学病院で臨床に復帰し現在に至ります。

現在は黄斑部疾患、特に加齢黄斑変性を中心に診療しています。私が医師になったときには治療法が皆無であった疾患に対し、いま実際に“治療をしている”ということに感慨一入です。

これまで研究から臨床まで一貫して眼内血管新生疾患に携わることができたことに僥倖を感じるとともに、これまで私を導いてくれた諸先輩方に感謝申し上げます。また、後進の先生たちには何かフィードバックできるものがあればと思います。

まだまだ未熟者ではございますが、今後とも皆様方のご指導ご鞭撻のほど宜しく願い申し上げます。



消化器外科講師
橋本 竜哉

このたび、山下裕一教授の御推挙により福岡大学病院消化器外科の講師を拝命いたしました。私は、平成 10 年に福岡大学医学部を卒業し、当院および関連施設で外科医としての修練を積みしました。平成 15 年より 3 年間、がん・感染症センター都立駒込病院に国内留学し、恩師・荒井邦佳先生のご指導の元、多くの胃癌手術・研究に従事させて頂きました。荒井邦佳先生からは技術・知識だけでなく、物事に真剣に取り組む姿勢など、人生において大事なことを教えて頂きました。また、全国から集まった仲間たちと切磋琢磨し大変充実した日々を過ごすことができました。本心に心から感謝しております。この場を借りてお礼申し上げます。福岡大学に戻った後は、胃癌の腹腔鏡手術を中心に、消化管疾患の治療に従事しております。腹腔鏡手術は、従来の開腹手術よりも患者さんの負担が少ない治療で、より良いものを提供したいという思いや、現状に満足することなく進化し続けようとする姿勢が背景にあります。私は山下裕一教授からそのような考え方・姿勢について深く教わることができました。

今後は、学んできたことで培った精神に基づいて、若い外科医や学生の指導、どのような状況の方であっても、患者さん一人ひとりにとって、最良の医療を提供出来るように日々努めてまいりたいと考えております。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしく願い申し上げます。



耳鼻咽喉科講師
樋口 仁美

このたび、中川尚志教授のご推挙により福岡大学医学部耳鼻咽喉科学教室の講師を拝命いたしました。

東邦大学を卒業後、福岡大学耳鼻咽喉科学教室に入局いたしました。入局後、筑紫病院、嘉麻赤十字病院で修練を行い現在に至ります。

筑紫病院でお世話になりました森園哲夫先生のもと、内耳毒性のある薬剤について実験研究を行い、中川教授ご指導のもと、2014年に学位取得しました。臨床においては、耳科学を中心に外来、手術を行っております。この福岡大学において医師として学び成長させて頂きました。医療の現場は医師1人の力ではどうにもならず、スタッフの方々とも協力してはじめて医業が成り立つこともいろいろな方のご指導で学びました。私が学んだ事を今後未来のある後輩に少しでも伝えていきたいと考えております。私も教室の一員としてさらなる発展に貢献できるように努力精進する所存でございます。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



筑紫病院循環器内科
講師
光武 良晃

平素は格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。このたび朔啓二郎教授、浦田秀則教授のご推挙により福岡大学筑紫病院循環器内科

の講師を拝命いたしました。重責ではありますが、一意専心循環器診療に全力を尽くし皆様のご期待に添うよう努力いたす所存です。

私は高校卒業まで離島の杓岐で過ごし、それ以来福岡で生活し、今では福岡で生活した年数の方が長くなりました。学生時代は部活動のバスケットに没頭し、平成14年に福岡大学医学部を卒業後、福岡大学病院循環器科に入局いたしました。当時の循環器科は朔教授が就任されて間もない頃で、同期入局者が10人と活気にあふれておりました。福大病院全体としても研修医が多く、2年間の研修医生活を送りました。

研修医修了後、平成16年福岡大学大学院に進学しました。いわゆる臨床大学院として循環器科の専門臨床に携わりながら、当時普及し始めた冠動脈CTでの臨床研究を開始しました。CTで評価した冠動脈疾患と様々なリスクファクターとの関連について報告し、三浦伸一郎准教授の指導の下、学位を習得することが出来ました。大学院時代はどんな些細なデータ・症例も英語の論文にして発表することに執着していましたが、それらが現在の大学病院で生き抜くことにおいて大きな手助けとなっております。大学院時代の全ての論文を三浦先生に指導して頂き大変感謝しております。

平成24年より現在の福岡大学筑紫病院循環器内科の勤務となりました。七隈の福大病院と比べ、筑紫病院は市中病院寄りの大学病院で診療に集中しやすい環境にあります。また、循環器内科の部長である浦田教授は、還暦を迎えた今でもバレーボールを続けておられる活動的かつ武闘派の先生で、20学年以上離れておられますが、我々の兄貴分の様なフレンドリーな一面も持っておられます。現在筑紫病院では心臓カテーテル治療などの急性期診療から、慢性期の心臓リハビリテーションまで担っておりますが、高血圧専門の医局でもありますので、過去の冠動脈CTを用いた臨床研究から脱却し、動脈硬化性疾患に対する新たな介入試験に取り組んでおります。

平成25年に筑紫病院は新病院となり、ICU・HCUが設置、血管造影室も造設され、徐々に紹介患者数も増加しております。引き続き地域医療及びメイドイン筑紫の臨床研究発表に尽力して参ります。今後も格別のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

長い間

ありがとうございました

平成27年3月1日～9月30日
までに退職された方

- 岩崎 宏教授 (総合医学研究センター)
- 黒木 政秀教授 (生化学)
- 斉藤 喬雄教授 (総合医学研究センター)
- 原田 広枝教授 (看護学科)
- 焼山 和憲教授 (看護学科)
- 村田 厚夫准教授 (筑紫病院救急科)
- 内田 直樹講師 (精神神経科)
- 黒木 嘉典講師 (放射線部)
- 東條 秀明講師 (筑紫病院循環器内科)
以上、3月31日付け
- 乗富 智明准教授 (消化器外科)
以上、9月30日付け

福岡大学医学会第72回例会および第38回総会(報告)

日時:平成27年9月16日(水) 17時～18時35分 場所:医学部臨床大講堂

1. 第72回福岡大学医学会例会 【進行】集会幹事 今福 信一

- 1) 開会の辞 集会幹事 今福 信一
- 2) 会長挨拶 医学部長 朔啓二郎
- 3) 第17回福岡大学医学会賞受賞論文講演
講演15分(質疑応答含む)
 - ①講演者1…西中村 瞳 座長…小玉 正太
「GM-CSF Treated F4/80+ BMCs Improve Murine Hind Limb Ischemia Similar to M-CSF Differentiated Macrophages」
 - ②講演者2…安野 哲彦 座長…中島 衡
「Functional analysis of iPSC-derived myocytes from a patient with carnitine palmitoyltransferase II deficiency」
 - ③講演者3…清水 知彦 座長…朔啓二郎
「Rosuvastatin Activates ATP-Binding Cassette Transporter A1-Dependent Efflux Ex Vivo and Promotes Reverse Cholesterol Transport in Macrophage Cells in Mice Fed a High-Fat Diet」
- 4) 第17回福岡大学医学会賞金賞論文投票
- 5) 新任教授講演 講演25分、質疑5分
講演者…川崎 弘詔(精神医学) 座長…朔啓二郎
「精神疾患への分子生物学的アプローチ」

2. 第38回福岡大学医学会総会

- 1) 議事 【進行】庶務幹事 松永 彰
 - ①報告事項 ②平成26年度会計報告および平成27年度予算案 ③その他
- 2) 第17回福岡大学医学会賞授賞式 【進行】集会幹事 今福 信一
 - ①開票結果発表 ②授賞式
- 3) 閉会の辞 集会幹事 今福 信一

教室だよ
Letter from a classroom

生理学



生理学教室は、伝統的に平滑筋、心筋、骨格筋などの筋生理を柱とした研究の中でも、とりわけ興奮収縮連関を制御する分子機構の解明を推し進めてきました。最近、高血圧、動脈硬化、筋変性疾患、心不整脈、

癲癇等、臨床医学をより深めた分子病態生理学的研究を行うために、新規 Ca チャネル遺伝子群 TRP (transient receptor potential) 蛋白質やリアノジン受容体、KCNQ チャネル分子を標的にこれまでの基礎研究に電気生理学、遺伝子工学、分子生物学的手法を融合させて研究を展開しております。一方で、新しい機能解析に関わる測定方法が日進月歩に開発されておりますが、心臓の機能の測定にはいまだに大きな制限があり、不整脈や心

不全などの病態や疾患に関してはまだ明らかにされていない部分が多くあります。そこで、この問題に取り組むために数理生理学的研究を開始しております。前述いたしました正確な実験研究とコンピュータ・シミュレーション研究を合わせることで、新規な心筋活動モデルを構築し、興奮伝搬現象を調べることで電気的な異常と密接に関係する不整脈や心不全の機序の解明が期待されます。

現在、教室は井上 教授を中心に、上原 准教授、沼田 講師、倉原(海) 講師、市川 講師、本田 講師、内田 講師、胡 助教ほか合計 10 名のスタッフと、特別研究員、研究支援者および大学院生によって構成されています。学生には講義と合わせてテュートリアル方式の学習法を実施することにより、日常的な学習が単なる知識の記憶でなく、ディスカッション、共同作業、コミュニケーション力や自ら調べる習慣を身につけて、将来に起こり得る困難に対処できる、現実的に実行できる力となるよう授業に工夫を凝らしております。

教室のモットーは、「明るく知的好奇心に溢れた研究環境」と「学生が気軽に覗ける開かれた教室」です。専門分野だけでなく医学一般に関心のある方々は、いつでも当教室に足をお運びください。

ホームページアドレス

<http://www.med.fukuoka-u.ac.jp/physiol/index-j.html>

教室だよ
Letter from a classroom

麻酔科学

教育

学生教育においてはベッドサイドでの実習に重点を置いています。初期研修医に対しては気道管理を含めた呼吸管理、循環管理など将来医師として必須の診療能力の取得を目標としています。後期研修医教育では日本麻酔科学会専門医研修プログラムが今年度より新たにスタートしたのに伴い「福岡大学病院麻酔科専門医研修プログラム」として関連 7 施設（次年度は 9 施設）と密な連携のもと質の高い専門医育成教育を提供しています。

研究

研究分野は臨床研究としてはより安全で高度な臨床麻酔を目指して周術期の心機能、血液凝固、新たな術後鎮痛法の開発、末梢神経ブロック、周術期感染症、術後高次脳機能障害などについてスタートしているところです。ペインクリニックにおいては低侵襲薬物療法の臨床研究を行っています。基礎研究においては留学生 1 名、大学院生（生理学教室）1 名の他、慢性疼痛動物モデルを用いた研究を薬学部との協力のもと開始しています。

診療

現在医局員が 44 名で臨床麻酔、ペインクリニック、緩和ケア、外科系集中治療を行っています。特に臨床麻酔においては、麻酔科管理症例が

約 6500 症例と九州地区の大学病院では 2 番目に多い手術麻酔を担当しており、質の高い安全で確実な麻酔を目指しています。今後は外科系集中治療の充実を重点目標にしています。

ペインクリニック

診療としては日本有数の施設として引き続き帯状疱疹後神経痛、CRPS など難治性の慢性痛患者を多数診療しています。緩和ケアにおいては専属医が神経ブロックの技術も駆使しながら疼痛緩和に日々取り組んでいます。術後の急性痛についても「術後痛チーム」により急性痛の克服に取り組んでいます。

女性医師支援

従来より女性医師の支援に取り組んでおり、ほとんどの女性医師が育児休暇後に職場復帰を果たしています。専門医を取得することを初期目標にしていますが、現在では 6 名の女性スタッフが指導者として活躍しています。



医師国家試験結果報告

第109回医師国家試験(2月7~9日実施)に113人が受験し、100人(新卒86人・既卒14人)が合格しました。合格率は88.5%、新卒のみの合格率は92.5%でした。

看護師・保健師国家試験結果報告

第104回看護師国家試験(2月22日実施)に102人が受験し、全員が合格しました(合格率100%)。また102人全員が第101回保健師国家試験(2月20日実施)にも合格しています(合格率100%)。

学位取得

次の方は、平成27年3月24日付けで福岡大学より博士(医学)を授与されました。

課程修了による学位取得者

- | | | |
|-----------------|-------------------|-------------------|
| ● 松崎 洋吏 (人体生物系) | ● 高岡 昌男 (病態機能系) | ● 日高 直美 (先端医療科学系) |
| ● 山住 賢司 (生体制御系) | ● 片岡 岳 (社会医学系) | ● 槇 研二 (先端医療科学系) |
| ● 田尻 豊和 (生体制御系) | ● 吉良健太郎 (社会医学系) | ● 山田 哲平 (先端医療科学系) |
| ● 金光 高雄 (病態構造系) | ● 原田 康平 (社会医学系) | ● 柴田 亮輔 (先端医療科学系) |
| ● 坂本 哲哉 (病態機能系) | ● 高田 耕平 (先端医療科学系) | ● 末松 保憲 (先端医療科学系) |
| ● 永野 智子 (病態機能系) | ● 則松 賢次 (先端医療科学系) | ● 長田 芳久 (先端医療科学系) |
| ● 萩尾 友宣 (病態機能系) | ● 後藤 麻木 (先端医療科学系) | ● 山本 智彦 (先端医療科学系) |
| ● 村岡 邦秀 (病態機能系) | | |

論文提出による学位取得者

- | | | |
|-------------------|-----------------------|-----------------------------|
| ● 竹本光一郎 (学外者) | ● 高橋 聡 (学外者) | ● 榎本 康子 (呼吸器・乳腺内分泌・小児外科 助手) |
| ● 野々熊真也 (放射線科 助手) | ● 新屋 智志 (消化器外科 助手) | |
| ● 山口 淳一 (学外者) | ● 吉兼由佳子 (小児科学 講師4条7号) | |